

和紙が編み出す

「サステナブル」



和紙をよって作った糸(右)と、和紙糸を編み上げた生地で作った長袖Tシャツ。初回販売時の価格は1万5400円

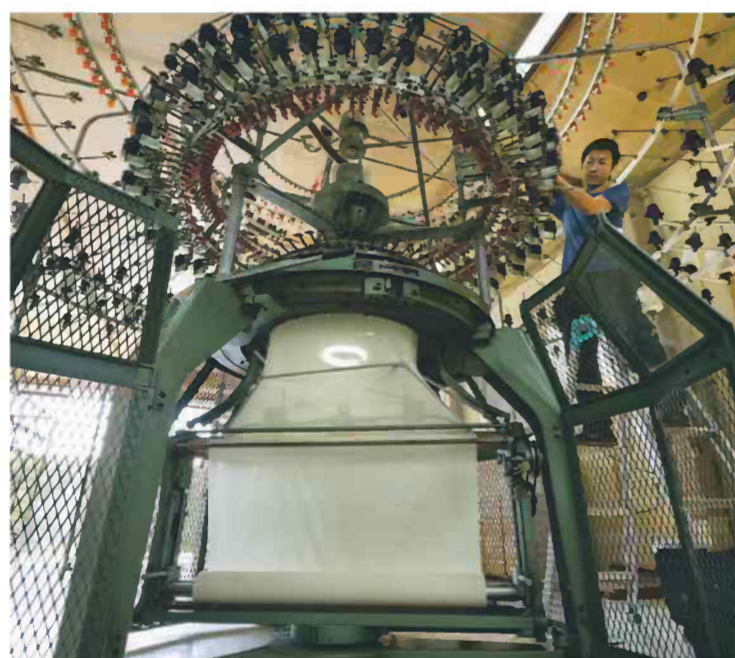
机の上に置かれているのは一見、普通の長袖Tシャツだ。袖に手を通してみると、肌まこわりつかず、軽くサラッとしている。風通しの良さは麻のようでもあり、かすかにしっとりとした感触は絹のようでもある。今まで体験したことのない手触りだ。

実はこのTシャツ、「和紙」からできている。東京都墨田区で1929年から続く縫製会社「和興」が手がけた。素材に使われているのは、越前和紙の発祥地、福井県の協和テキスタイル社が開発した和紙100%の糸だ。

糸は和紙をテープ状にカットしたものを、コヨリのようにねじりながらよりあげる。ウールや綿の糸に比べ、けぼ立たずなめらかで独特の光沢がある。重さは綿の糸の約半分と軽量だ。「和紙の原料はフィリピンで採れるマニラ麻です。天然繊維のため焼却しても有害物質が出ず、埋めると地中分解されま

す。またマニラ麻は成長が早く、年間を通じて栽培が可能なので、天然資源の過剰採採にもあたりません。サステナブル(持続可能な素材)なのです。和興の専務、國分博史さん(41)は、和紙糸の利点をそう説明する。

2014年に妻の実家の家業である和興に参画した國分さんは「仕入れた生地を加工するだけでなく、生地の開発も手がけ、新たな価値観を提案したい」と考えた。そこで着目したのが素材としての和紙の可能性だった。



(写真上)昔ながらの編み機で、筒状に編まれる和紙の生地。ゆっくりとしたペースでふくらと編み上げる

(同右)イタリアで開かれたピッティ・ウオモで、来場者に和紙でできた洋服の説明をする

和興の國分博史さん(和興提供)

伸縮性のあるニット生地に編み上げる手法は、千葉県のニット工場とともに開発した。強く張力をかけて高速で編む通常の編み方では糸切れしやすく、和紙の風合いも損なわれてしまう。そのため昔ながらの編み機を使って筒状にゆっくりと編み上げた。

裁断の工程でも、ヨレが出やすい和紙生地の特性をどう抑えるか、試行錯誤した。生地の開発には3年を要したという。「開発過程では和紙の機能性の高さも分かりました。消臭、抗菌、調湿効果が検査機関で数値化できたのです。例えば臭いのもととなるアンモニアに対しては、綿に比べて2.2倍の消臭効果がありました」(國分さん)

今年1月には、イタリアで開かれた世界最大級の服飾展「ミラノピッティ・ウオモ」にこの長袖Tシャツを出展した。参加した海外のバイヤーからは「サステナブルファッションの先端分野として、打ち出しやすい」との声が寄せられたという。國分さんのもとには「米国のアパレルブランドやドイツの小売店、美術館などからも引き合いがある」といい、手応えを感じている。

環境負荷の少なさや機能性が注目される和紙だが、その「カッコよさ」に着目し、若者の間で人気を呼んでいるブランドもある。2016年にスタートした「ゼロ」だ。生地に和紙を使いつつ、デザイン性や多彩な商品展開にこだわっている。「和紙の魅力は涼しげで張りのある『シャリ感』と軽さ。立体的なデザインがおしゃれに決まる」。ブランドを展開するZEROインテナーナショナル(兵庫県西宮市)の創業者、岡本章吾さん(31)は、そう話す。

商品は腰回りがゆったりとしたサルエルパンツやパーカー、スエット素材のトラックジャケットなどさまざま。ジャケットをはおると、生地はしっかりとしているのに軽い。フィットするが締め付けられない不思議な心地だ。トレーニングウェアをベースとしたトラックジャケットは、ともすると部屋着のようになりがちだが、生地の張りや光沢のおかげで上品に見える。「和紙は、障



(写真上)ゼロでは和紙を使った生地の下着なども展開。価格はTシャツが1万890円、ボクサーパンツが3080円。右下の足袋風靴下は2420円で、海外の客に人気だ



(同右)和紙を使った服の仕上がりを確認するゼロの岡本章吾さん

子やふすまなど日本人の生活に欠かせない文化。その文化を時代に合わせた形でまとうてほしい」(岡本さん)

ゼロの服に使われている和紙は愛媛産だ。90年以上の歴史を持つ備後燃糸(広島県福山市)が和紙を糸にし、大阪府の山崎繊維工業が綿やポリエステルなどを加えて生地に編み上げる。「わずかに他の繊維を混ぜることでデザイン

の幅を広げ、より多くの人に手にとってもらえるように」と考えています」と岡本さんは話す。

「ゆるいシルエットでもスタイリッシュ。首回りに和紙ならではのふわっとした軽さがあるのがいい」と評価する。オンラインのみの販売ながら、売り上げは前年の2倍と伸びており、カナダや米国など海外からの購入も多い。衣類のほとんどを海外生産に頼っている現代の日本において、日本製でありながらサステナブル、そしてカッコよくもある「和紙の服」。今後も注目は高まっていきそうだ。

ジャーナリスト 三神万里子
遠藤宏撮影

訂正

7月19日付「和紙の服」の記事中、和興のTシャツに使われる和紙100%の糸について「福井県の協和テキスタイル社が開発した」とあるのは「東京都世田谷区のキユーテックスが開発した」の誤りでした。